

初等教育における総合表現活動をめぐる一考察 —上越教育大学附属小学校「音楽集会」の実践から—

時 得 紀 子*・湯 澤 卓**

(平成26年9月30日受付；平成26年11月5日受理)

要 旨

本研究は、上越教育大学附属小学校における伝統的な総合表現活動のひとつである、「音楽集会」の最新の実践に焦点をあて、活動後の子どもの記述や活動へのパフォーマンス評価、企画・運営、指導に携わって来た教員へのインタビュー等をもとに、子どもに培われる様々な力について論考した。

1979年の発足当初から異学年交流を重視し、全校合唱、全校一斉のダンスに加え、各学級毎の創作ダンス、縦割り学年で構成されるグループ活動で実践を継続してきた。さらに、音楽集会の成果と課題を「心の活動」の時間で話し合うなど、単なる表現活動にとどめず、他教科・領域の学習にかかわらせる発展的な取り組みもなされてきた。

この総合表現活動を通じ、互いの「心をつないで、みんなの楽しみをつくろう」と探究する様子は、子どもたちの記述や教員のパフォーマンス評価などから見取ることができる。

音楽集会のスタイルは、歌唱、演奏、ダンスの多様な表現がかかわりながら舞台を形成する様式が、実に35年以上継承されてきた。今日の学校音楽の国際的な動向からも、音楽がダンス、図工、演劇、国語（モノドラマ）など他の表現領域と“Integrate”する実践から、創造的思考、課題解決力を促す学習がいつそう模索されてきている。こうした視座からも、長年に渡って附属小学校の総合表現活動が貫いてきた縦割り異学年交流、身体表現の重視など、音楽集会から示唆される諸活動に焦点をあてて導出し、その優れた実践について考察を行った。

KEY WORDS

音楽集会 Music Assembly 総合表現活動 Integrate Expressive Activities 小学校 Elementary School
表現活動 Expressive Activities ダンスパフォーマンス Dance Performance

1 研究の背景

1. 1 音楽科教育をめぐる国際的動向

音楽、美術（図工）の学習、総合的な学習の時間、他教科・領域の学びや、関連した芸術領域であるダンスや演劇、メディア・アートなどが横断的にかかわって展開される多彩な表現活動（本研究では「総合表現活動」と総称する）は、世界の国々で急速に拡がる傾向にある。2012 ISME（国際音楽教育学会）ギリシャ大会では、世界各国から“Integrated Study”（音楽と他教科・領域等を関連させた学習）を共通テーマとした研究者が一堂に会した枠組、“Practice and Research in Integrated Music Education”が特設され、筆者らを含む約30件の口頭発表がなされた¹⁾。

芸術諸教科の統合カリキュラム開発も盛んであり、かつ統合がなされて久しい豪州を始め、欧州、米国、アジア諸国からも、音楽が他の学習と“Integrate”することで、より高次な創造的思考、課題解決の思考などが育まれているという成果が報告された²⁾。

このISME世界大会のみならず、ISMEアジア環太平洋地区大会（APSMER）でも、口頭発表と並行して開講されるワークショップにおいて、芸術諸教科のかかわる多彩な学習活動が提案されるようになってきている。最新の2013シンガポール大会では、音楽教育学会と美術教育学会（ArtsEducationConference）が共催するという、複数の芸術教科がかかわる初めての開催となった。ワークショップの中には、音楽や美術教育の枠を超え、音楽、身体表現、絵画がかかわる学習も展開され、これらを通じ、異なる表現領域と“Integrate”した活動から、音楽、美術の意味や役割について、客観的に捉える視点も培われる設定などが見られた³⁾。

ISME 2014ブラジル大会においても、前回の2012ギリシャ大会に続き、音楽と他教科・領域等を関連させた学習を共通テーマとした研究者による発表の枠組、“Practice and Research in Integrated Music Education”（PRIME）が

*芸術・体育教育学系 **上越教育大学附属小学校

特設された。音楽が他の学習と“Integrate”することで、創造的思考、課題解決の思考を促すのみならず、社会の変化に対応する資質・能力を育むと共に、現代の多様な表現芸術を享受する力を養う視点なども新たに加わった。このように“PRIME”の研究発表は前回にも増して多様な切り口からの探究がなされ、今夏ブラジル大会においても筆者らを含む30件以上の発表及びワークショップが開講され、活動後には活発な討議もなされたのである⁴⁾。

その一方で教科の過密化に伴って時数縮減に追い込まれ、やむなき事情から1つの時間枠に音楽、図工、ダンスなどを統合させたかたちで組み込む実践が見られることも報告されている⁵⁾。我が国における学習指導要領の次期改定における動向は未知数であるが、アジア近隣諸国においても統合が進められる現況にあって、我が国における芸術教科の在り方、意義についての早急な検討はもはや喫緊の課題である。

こうした中で、学校音楽の活路を見出していくにあたっては、全国の小学校から取り組みの実践が提案され、優れた実践についての情報を発信し合い、互いに手を取り合って模索していくことがこれまで以上に求められているのである。

このような視座から本研究では、上越教育大学附属小学校（以降、附属小と示す）において位置付けられている、伝統的な総合表現活動である「音楽集会」を実践について取り上げ、有効と捉えられる実践事例や課題について考察を試みるものである。

1. 2 音楽科教育をめぐる我が国の課題

我が国の音楽科の学習は、「歌唱」、「器楽」、「鑑賞」、そして中・高等学校における「創作」、小学校における「音楽づくり」と呼ばれる4領域に大きく分類されている。しかしながら、従前の我が国の授業では、とすれば「歌唱」や「器楽」の領域に偏った学習を展開してきた。

今後、子どもたちによる「創作」（小学校「音楽づくり」）の領域の学習を充実させ、創作活動を豊かに展開する学習を重視していくことは、今日学校教育に求められる創造力、課題解決力、協働力等、多様な力の育成にも貢献できるものと捉えている。

また、初等教育に目を向けるならば、音楽を専門としない多数の教員が音楽授業に携わっているという我が国の現状が指摘されよう。指導者や学習者が音楽技能の差異にかかわらず、かつ、技能への不安から苦手意識を抱くことなく、創造的に音楽学習に取り組むことを可能にする意味でも、総合表現活動型カリキュラム開発と共に音楽授業における多彩な創作活動のカリキュラム開発に今後も積極的に挑んでいくことが切望されている。

2 上越教育大学附属小学校「音楽集会」の実践から

2. 1 音楽集会の変遷

音楽集会は、上越教育大学附属小学校（以降、附属小とする）で長年取り組まれている集会活動であり、その始まりは昭和54年度に遡る。翌昭和55年度は上越教育大学附属小への移管前の新潟大学附属高田小としての最終年度に相当するが、附属小『わが校百年の教育史』に収められた資料の中から、「わが校の沿革」をひも解くと、「昭和55年（1980）全校音楽集会参観者続く（六）^{①)}」とあり、同年6月の実施が記録にも残されている。

ほどなく、新潟大学附属高田小学校から移管されたことを受け、昭和56年4月からは上越教育大学附属小学校と改称された。これを契機として、本格的に毎週土曜日朝の全校集会の中にこの音楽集会が位置付けられ、さらに土曜の休日が隔週となった後には隔週土曜の開催となり、朝の活動としての定着を見るのである。

平成14年以降、週5日制となってからは、土曜開催でなく、毎月1回の実施へと移行した。この間、演奏形態にも変化が見られた。始まりの当初は、ソプラノリコーダー、アルト・リコーダー、鍵盤ハーモニカの楽器編成による器楽合奏、もしくは合唱といった演奏発表が一般的であった。しかし、子どもの演奏に活気が見られず、「いっこうに盛り上がらない。」と言われる集会が数年続いた後、ドラムセットを取り入れたことを機に喜々として子どもたちが演奏に取り組むようになった⁶⁾。

新たに導入されたドラムが刻む強烈なビートに後押しされ、子どもたちが拍感に乗って生き生きと演奏するようになり、音楽集会の「盛り上がり、活気に満ちた交流」へと変化を遂げたのである。

音楽集会が生き生きとした活動へと変わる大きな契機となったひとつの要素は、教員側から提案されたダンスの導入である。こうして、当時流行していたディスコダンスが活動に加えられるようになったが、むしろ子どもたちが、「ダンスは恥かしい。」といった難色を示した。しかしほどなく身体表現に夢中になっていった。そして、何より動きを入れることによって一層、躍動的な音楽活動に導かれたのである⁷⁾。

現行では、全学年児童、教職員が一体となって取り組む、春・初夏・夏・秋・冬の年5回の実施となっており、とりわけ、研究協議会での公開となる春の集会は、3か月もの準備を費やす本格的な舞台制作となっている。

集会では、異学年交流の音楽あそび、高学年によって振付がなされる全校ダンス、6学年までの各クラス1分間の舞台パフォーマンスの制作等を通じて、児童に育まれる様々な力が育まれる。

音楽集会活動後には諸教科の学びの記録と同様、子どもたちによって振り返りの記述がなされる。2013年度の春の研究協議会の、6年生「心の活動」(道徳)の公開授業では、多くの時間を費やし最高学年として臨んだ舞台を振り返り、クラスの話し合いを通じ、価値を共有、共感する子どもの姿が見られた。

2. 2 音楽集会と子どもの姿

音楽集会は、ミュージックプロジェクトを中心に、子どもが主体となった活動をする。企画、立案はミュージックプロジェクトが行い、全校に実施方針と内容を伝える。基本的には歌、ダンス、ゲームなどのイベントで構成する。

春、初夏、夏、秋、冬と年5回の開催が伝統となっている。異学年集団の中で、子どもが主体的に発達に応じた役割を果たし、全員で表現を創る楽しさ、充実感を味わう活動なのである。近年では、音楽、舞踊と幅を広げるに伴い、舞台設定、衣装といった、音楽以外の芸術との関連も強く見られるようになった。

平成24年度から、附属小学校では『子どものつくる意味に焦点を当て、「自分らしい生き方をつくる子ども」を幅広く教育課程の編成に取り組む』を掲げ、平成24年度、平成25年度ともに「子どものつくる意味」に着目した実践に取り組んできた。この視点から同校では、音楽集会の実践から子どもが次のように意味を生成していくを次のように捉えている。(『』は、子どもの記述、発言をもとに同校研究紀要において子どもの言葉として記載されている。)

集会活動を通して、子どもは『クラスのみならず歌ったり踊ったりするのは楽しい。だから音楽集会は楽しみだ』『高学年として、プレイングチームのみならずをまとめていこう』『学級で力を合わせると、すごいことができるんだ』という意味をつくる。

音楽集会は学級(学年)集団で表現する場である。全校ダンスや歌唱を通して、学級集団、学年集団、異学年間で表現することのよさを実感する。また、音楽集会は認め合いの場でもある。他学級、他学年の表現から、驚きを感じたり、おもしろさを感じたり、表現の素晴らしさに感嘆したりする。その経験から、子どもは『次の音楽集会ではこうしよう』『こんなことができるといいな』と、自主的に関わろうとする。

集会活動を繰り返す中で、子どもは学年にふさわしい役割や立ち居振る舞いに気付く。例えば、低、中学年は、高学年の表現や役割にあこがれをもつ。『来年は、ミュージックプロジェクトに入ろう』『次の音楽集会では、6年生のようにきれいな声で歌おう』という意味をつくる。自分の役割を考えると同時に、次の役割へのあこがれをもつことで、よりよい表現やよりよい活動への思いを強め、さらに活動に意欲を高める²⁾。

音楽を楽しむ、自分のよさを思い切り発揮する子どもを育むという視点から、同校における音楽集会は、全校児童が音楽活動を通して、一人一人の持ち味や個性を大切に、互いを認め合い、楽しみを共感し合う場として、児童が大切にしている集会活動の一つとされている。

音楽集会は一般に小学校において広く取り組まれており、音楽鑑賞会を発展させたものや、教師が指導する全校の音楽授業的な扱いで運営されることも多いが、附属小の音楽集会は子どもが運営の中心にあり、体育館いっぱいに拡がり、フロアを埋め尽くしての全校児童による多彩な表現活動という点が特徴なのである。

2. 2. 1 「音」「身体表現」を通じて意味をつくる子ども

子どもは、様々な音楽との出会いを通して音(音楽様式すべて)、踊り、などを総合的に捉えながら、異文化理解を深める。同小学校では、これらの「音」「身体表現」から子どもが「意味をつくる」ことに次のように捉えてまとめている。

『曲によっていろいろなメロディーがあり、全てがドレミの音階でできているのではないんだね』

『いろいろな音があり、それらが音楽の中でよい味を出しているね。楽器の音にこだわっているのかな』

『この曲とこの曲は、全然違う国の音楽なのに似ているね。私はどちらも好きだな』などの意味をつくる。

世界には様々な音楽があり、様々な人が様々な形で音楽を愛好している。子どもは、音楽科の活動を通して様々な音楽に触れ、聴き、演奏する経験を6年間積み重ねる。そうすることで、様々な音楽の共通点や相違点に気付いたりする。経験の積み重ねによって、子どもは自らが嗜好する音色や音楽の方向性に気付く。自分の嗜好する音楽を見つけた子どもは、より音楽に主体的にかかわり、音楽を愛好しようとする。このように、様々な音楽とかが

わることを通して、子どもが音楽を愛好する心を育てることを大切に⁽³⁾。

身体表現を通じて、子どもは『音楽に合わせて体を動かすのが楽しい』『ダンスすると、音楽をもっと好きになれる』などの意味をつくる。

子どもは、年間を通していろいろな身体表現を見たり、実際に行ったりすることで、身体表現が音楽と密接にかかわっていることに気付く。そこから、『踊りたくなる音楽と踊れない音楽って、どんな違いがあるのかな』『曲の雰囲気によって、体の動かし方は変わってくるのはどうしてだろう』という感覚を得る。そこから音楽を構成する要素に興味をもったり、自分が嗜好する音楽の傾向に気付いたりする。このような経験を繰り返すことで、より深く音楽にかかわり、楽しみながら音楽にかかわる心を育てる⁽⁴⁾。

2. 2. 2 意味をつくる活動の支援として

音楽集会と相互にかかわり密接な関係を持つ、音楽科の授業においては次のような支援を意図している。

これらの意識は、音楽集会の中の異学年で構成されるプレイチームにおけるゲームや音楽遊びにおいても生かされている。

(1) 「音」の世界を広げること

私たちの身の回りには、たくさんの音がある。それは楽曲を演奏する音として存在するものだけではない。例えば風鳴、雨音、自動車のエンジン音なども音と言える。それらの音を、「雑音」としてではなく「音」としてとらえることで、子どもは、いろいろな「音」の存在に気付き、それに意味をつくる。

音楽科では、特に我が国の音楽や、様々な民族音楽で使われている音具や楽器の音に注目する。それらを演奏で活用したり、劇の効果で使用したりしながら、子どもが自ら「音」の世界を広げることが大切にする。

(2) 様々な音楽の存在に気付くこと

クラシック、ポップス、歌舞伎、サンバなど、様々な音楽を教材として取り上げる。子どもにとって身近にある様々な音楽にスポットを当てたり、めったに耳にしない音楽に触れる機会を設けたりすることで、様々な音楽の存在への気付きにつなげたい。そして子どもが音楽に対する興味をもち、常に様々な音楽を認知しようとアンテナを張り、意欲的に音楽に関わろうとする姿につなげる。

(3) 舞台の上で演じること

舞台の上で演じる活動を通じて、子どもが自分のもてる力を全て発揮して音楽活動に取り組もうとする気持ちを育てる。演じることを通して、子どもが『表現することは楽しい』『演じると、普段の自分と違う自分に気付いた』という意味をつくる⁽⁵⁾。

ここでいう舞台の上で演じる活動は、歌うこと、演奏すること、ダンスすることなど、広義にとらえる。舞台の上に入った瞬間から、演者は観衆に囲まれ、その視線の中心に立つ。緊張感の中、自分が感じ、考え、思ったことなどを表現し、伝える。そのためには、自分の中にある羞恥心を取り除き、観客に伝わるように大きく動いて演じたり、観客に伝わるように歌ったりしなければならない。

乗り越えなければならないことは多いが、表現したことが伝わったときの楽しさ、うれしさは、演じたものでなければ味わえない醍醐味である。そういった経験を積み重ねることで、子どもはさらに意欲的に表現に親しみ、また表現の幅を広げようとする。

2. 2. 3 集団活動において「心をつなぐ」活動

子どもは本来、仲間と共に活動に参加したり、仲間と共に作り上げたりする活動を好んでいる。このような活動に向かっただけを動かすエネルギーとなるのは、活動そのものもつ楽しさやおもしろさだけでなく、それ以上に「仲間と共に」といったような仲間との心をつながりを感じ合うことではないだろうか。こうした発想に立ち、附属小では、集団活動における「心豊かに生きる子ども像」を「心をつなぐ、みんなの楽しみをつくらうとする子ども」として、音楽集会と子どもの心にかかわりの姿について次のように考察している。

「心をつなぐ」とは、同じ時間や空間を共に過ごし、「楽しい」とか「うれしい」といったことを互いに感じあうことを指す。「協力する」とか「助け合う」といったことだけで互いに感じあうだけでなく、「自分を大切に考えてくれる」とか「自分の考えにうなずいてくれる」「お互いの息が合う」といったことから感じあうことができる。それは互いのよさや違いを受け入れる、また受け入れられたということを感じあうこととも言えるのであろう。

そのように互いを受け入れながら、子どもは「みんなの楽しみ」をつくっていくのである。「みんなの楽しみ」とは、1人で味わえない、そう快感や感動と共有することを意味する。「心をつないだ」仲間との活動は、たいへん楽しくて心地よい時間となる。楽しい時間に浸ると、またそういった時間に浸りたくなる。つまり仲間との活動がさらに広がっていき、その広がりが仲間との心のつながりを更に広げ、太くしていくのだ。

互いの「心をつないで、みんなの楽しみをつくろう」としていく姿に豊かに生きる子どもを見ることができるのである⁽⁶⁾。

2. 3 各学年の音楽科授業における活動

先述したように、音楽科の授業は、音楽集会と相互にかかわり互いに密接な関係を持っている。2014年度の授業構想については、表1、2の通りである。日頃の音楽活動の積み重ねが音楽集会での表現に生き、また音楽集会での学びが授業においても相互作用で生かされているのである。ここでは2013年度の主な音楽科授業構想を概観し、音楽集会にも活用されるであろうダンスパフォーマンスや舞台演出の活動についての支援に着目する⁽⁷⁾。

また、音楽科授業における様々な活動は、音楽集会の中の異学年で構成されるプレイチームにおけるゲームや音楽遊びにおいても生かされている。次に掲げる諸活動を通じ、子どもは様々な音楽との出会いや、身体表現にかかわる活動を積み重ねていく。(Mはモジュールを示し、1Mあたり30分で構成される)

○ 1年生「おんがく絵本ばこ」14M

お気に入りの絵本を選び、それを音読する。前活動の「音さがし 音あそび」で見つけた音を効果音として挿入する。効果音を挿入することを通して、『音を入れるとお話をもっと面白くなるね』『音が入ると本当に動いているみたいだね』という意味をつくる。

○ 2, 3年生「むかし話で音しばい」

(2年生10M 3年生10M)

お気に入りの昔話を選び、それを演じる。1年生の「おんがく 絵本ばこ」での経験を生かし、効果音を入れる。さらにBGMを加えていく。『ここで入れる音は、この音にしよう』『BGMを入れると、雰囲気が変わるね』と、舞台の演出に関わる意味をつくる。

○ 4年生「ダンスでミュージック」15M

いろいろなダンスを通じて、拍の流れやリズムの違いに気付き、音楽の特徴としてとらえる。グループで発表したり、個人でダンスをしたりしながら『みんなと踊ると楽しいね』『拍手をもらおうとうれしいね』という意味をつくる。

○ 5年生「チャレンジ! ステージアクト」10M

6年生「ステージアクト ファン&ファン」20M

ミュージカル作品に触れたり、音楽劇の創作を行ったりする。ミュージカルやオペラなどの舞台芸術を鑑賞して興味を広げた後、舞台の上で実際に演じる。一人一人が、演じることを通して表現する面白さや難しさに気付き、演じることについて考える。舞台での表現が観客に伝わるためにはどのような工夫が必要か、ということも思考し、次第に音響、装置、効果、道具、演出の存在と、その重要性に気付く。このような活動を通して、表現するために必要な要素、表現を体感的に理解し、表現をより高めようと努力する。そして、よりよい作品をつくるために、子どもが一人一人の思いや意図を話し合う。話し合っ、さらに感じ、考えたことを表現に盛り込み、実際に演じる。これらを通して『演じるって面白い』『いろいろなことを考えないと、表現したいことを相手に伝えることができない』『みんな力で力を合わせて一つの作品をつくろう』という意味をつくる。

2. 4 ダンスパフォーマンスについて

2. 4. 1 近年のダンスパフォーマンスの意義

2006年度から、音楽集会のフィナーレは、各クラス単位による創作ダンスパフォーマンスの披露が定着を見た。

このクラス単位の表現活動において、子どもたちは日本の伝統的な音楽の様式や、アジアの伝統的な音楽、あるいはかつて親や祖父母の世代から人気を博した名曲といわれるポップスやディスコミュージックなど、多様な音楽に触れる。世代を超えて受け継がれる名曲にも幼くして触れ、全身で体感しながら享受する貴重な体験の機会を得ることからも活動の意義ははかり知れないものと捉える。

2. 4. 2 ダンスパフォーマンスのテーマと主な活動内容

2014 「ふぞく総おどり」 「新潟総おどり」をモチーフに日本の舞踊、日本的な音楽を用いてダンスを創作。

2013 「映画音楽でSHOW」 映画音楽をモチーフに、ダンスを創作。子どもたちはこの舞台を通して過去の名曲に触れることができるという効果もたらされた。

- 2012 「FUZOKU457」 アイドルライブステージをイメージしながらダンスを創作。
- 2011 「あわおどり」 阿波踊りの型をモチーフに、振りをつけ、所作や掛け声を変えて、創作。
高学年のパフォーマンスでは、踊りにスローモーションを加えるという創造的発想が見られた。
- 2010 「ディスコトレイン」 ディスコミュージックをモチーフに、オリジナルダンスを創作。
選曲の対象が時代をさかのぼるため、低学年などでは、各クラスの学級担任に任された。
- 2009 「サタデー・モーニング・フィーバー」 Y・M・C・Aなどの80年代のディスコの名曲をダンスで創作。
- 2008 「沖縄 カチャーシー」(沖縄からの演奏家らを迎えた生演奏に合わせて) オリジナルな動きを創作。
- 2007 「インドネシア・バリ島の踊り」(児童によるガムラン生演奏に合わせて) オリジナルな動きを創作。
- 2006 「青森ねぶた踊り」 ラッセラーの掛け声とリズムに合わせて、オリジナルな動きを創作。

2. 4. 3 2009年度「ディスコトレイン」の実践から

2009年、夏の音楽集会の全校ダンスでは、80年代ディスコの名曲『Y・M・C・A』を全校で踊る活動に挑んだ。このダンスの習得をめぐって、上級生と下級生がパフォーマンスの上達をめぐって、憧れを抱いたり、憧れてもらうことから達成したり、伝授する喜びを見出していく子どもの姿を同校では次のように捉えている。

このダンスの振り付けは、音楽集会を運営するミュージック・プロジェクトの子どもが考えました。「Y・M・C・A」と掛け声をかけるところでは、全校が頭の上でアルファベットを模した振り付けをします。全校の掛け声が一つになって最も盛り上げる瞬間です。

ミュージック・プロジェクトに所属する直美さんはダンスが得意で、いつもダンスの場面で集団をリードしています。直美さんは「Y・M・C・A」の掛け声のところで、ステージに駆け上がり、全校の前に出てあざやかな振りで踊ります。直美さんの動きは自信に満ち、身体からは踊る喜びがあふれています。

ステージの上の直美さんの目に、ある1年生の姿が映りました。その子は、自分の振りを見ながら真似して踊っているのです。しかし、直美さんのように素早く身体を動かすことができません。動きは少々ぎこちなく、掛け声と動作が一瞬ずれています。

その姿に、直美さんが反応しました。1年生の子どもによく分かるように動きの見せ方を変えていったのです。自分一人で格好よい振りを見せるだけでなく、見ている相手を意識して、あざやかで切れ味のある動きをさらに大きくして、踊りのポイントを分かりやすく伝えようとしているのです。さらに直美さんは張り切って自分の得意なダンスを動きで教えます。直美さんの振りを見た1年生の踊りは掛け声と動作がピッタリと合うようになっていきました。直美さんの真似をすることで踊ることの楽しさを味わった1年生は、一段と大きな声で「Y・M・C・A」の掛け声をかけ、ダンスに夢中になっていきました⁽⁸⁾。

3 総括及び教育的示唆

本稿での考察を経て、音楽集会の諸活動の制作過程で、仲間とかかわり合う機会を重ねながら、子どもたちは、人の心理を観察する力、自尊、他尊感情の芽生えなど、人幅広い人間理解につながる気付きを得ているものと捉えられる。

これまで我が国では、学校音楽をともしれば西洋機能と声に偏った芸術の視点から捉える傾向があった。かつての附属小学校も課外活動の合唱に重点を置き、1988(昭和63)年～1996(平成8)年まではNHK合唱コンクール等において県大会及び全国大会への出場を途切ることなく果たしてきた。この輝かしい受賞歴を経てなお、同校では公教育としての音楽活動の在り方を再検討し、1996(平成8)年度をもって合唱部を廃止とした。そして、翌1997(平成9)年度以降、あまねく全ての児童の表現活動を支援する体制へと脱皮した。こうした学校方針の転換を経たからこそ、これを契機として音楽集会やポプラ祭(音楽発表会)において、より多くの児童の表現活動の充実に導かれたのではないかと筆者らは捉えている。

それゆえに附属小は西洋機能と声の学習に偏ることなく、年月とともに改善を重ねながら、音楽、舞踊、図工、心の活動等の幅広い学習とかかわりながら、30年以上に渡ってバランスの取れた総合表現活動の継続を実現してきた。

同校音楽専科教員でもある筆者は、「子どもは音楽の再現者ではなく、表現者であるべきである」と捉えている。技能の習得を主眼とした楽曲を再現させる活動ではなく、一人一人の子どもが、主体的に思いを表出する活動となることを目指してこの音楽集会を設定し、創意工夫を凝らしてきた。そして、今後も音楽科授業との相乗効果で表現が

さらに進化していくことを願いながら、この音楽集会での表現活動を支援していきたいと考えている。

今日の我が国の音楽科が教科過密化に伴う再編統合等により、時数確保が厳しい現状ゆえにこそ、音楽授業以外の表現の機会を活用し、児童・生徒の協働から培われる多様な力、音楽学習の果たす役割やその意義について、改めて捉え、発信していくことが今まさに求められている。

一方では、わが国の子どもたちの課題とされる、表現・コミュニケーション力の不足は、極めて深刻な状況にあることが叫ばれて久しい⁸⁾。このコミュニケーション力の育成は、音楽などの表現活動のみならず、幅広い教科の学習活動の中であまねく培われることが望ましいと筆者らは捉えている。

冒頭にも述べた国際的動向からも、今後は、「芸術」理解の方向から、「人間」や「社会」の理解も視野に、「汎用的なコミュニケーション能力の育成」において貢献できる音楽学習をめざして改善していくことが求められている。こうした発想に立ち、附属小の音楽集会にかかわって展開される「心の活動」の実践など、他者とかかわる多彩な活動は今日の教育現場が抱える諸課題の改善において多くの示唆を与えるものであり、本実践があまねく拡がることを期待している。

参考資料

2014年度 年間活動構想⁹⁾

1 活動のねらい

日本の音楽を中心とした様々な音楽にかかわることを通して、音楽に親しみを感じ、様々な表現のよさを味わったり、よりよい表現を目指したりする。

2 子どものつくる意味

○ 全員で音楽することについて

子どもは、『友だちと一緒に演奏するのは心が通い合うようで楽しい』『楽器の演奏は苦手だけど、舞うことで音楽を感じられた』『新しい音楽をたくさん知って、友だちと一緒に音楽をしたい』などの意味をつくる。

○ 様々な音楽にかかわることについて

子どもは、『日本の楽器の響きは美しいと思う』『その音楽によって少しずつ仕組みが違う』『音楽にはそれぞれのよさがあるからもっと知りたい』などの意味をつくる。

3 意味をつくる子どもの歩みをとらえてつくる教育活動

(1) 各学年の活動の概要

○ 1学年「遊びうたボックス」

わらべうたや手遊び歌などを集め、遊びながら歌う。また、集めた歌からヒントを得ながら、学級の総合単元活動をテーマにした、自分たちの手遊び歌をつくる。

わらべうたや手遊び歌は、家庭、保育園、幼稚園などで子どもがよく見聞きし、親しんできた音楽である。わらべうたも手遊び歌も、単純な構造の音楽である。単純だからこそ音楽的な要素を子どもが認知しやすく、低学年の子どもも音楽的価値に迫ることができる。

わらべうたや手遊び歌に十分親しんだ子どもは、『言葉を変えたい』『遊び方を変えたい』などの意味をつくり始める。その瞬間をとらえ、学級で取り組んでいる総合単元活動の内容を取り上げた遊びうたづくりに取り組む。

○ 2学年「わくわくりズム」

4分音符、4分休符、8分音符、8分休符で作られたリズムモデルを自由に組み合わせながら、リズムパターンをつくる。パズルのように組み合わせながら、子どもはリズムを変化させることを楽しむ。また、音符や休符は表現を統一することに有効であることにも気付く。

子どもは自分たちのアイデアを反映させながらいくつもリズムパターンをつくり続ける。次第に楽器を取り入れようと考えたり、長く演奏しようと考えたりするだろう。それら全てを工夫ととらえ、音楽的な気付きとして蓄積する。

活動の後半では、キャッチボールのようにリズムを交互に演奏する。それを通して子どもは『何度もキャッチボールすると、気持ちがわくわくしてくる』『友だちと心が通った気がする』などの意味をつくる。

○ 3年生「たいこでダダン」

2年生で培ったリズムへの思いや、リズムづくりをした経験を基に、日本の太鼓による打楽器アンサンブルをつくる。総合単元活動で出会い、かかわったひと、もの、ことなどをテーマにして、自分の思いを交えながら楽曲をつくる。

音楽を構成する要素を取り入れながらアンサンブルをつくり上げた子どもは、『自分の曲を誰かに聴いてもらい』と願い始める。そこで、子どもの願いを汲みながらコンサートを開くことも考える。場所は校内だけでなく、高田公園、雁木通りプラザなど、子どもの思いに応じて設ける。

○ 4年生「そうきょうの音頭」

総合教科活動で対象とするひと、もの、ことを題材として取り上げ、音頭をつくる。

音頭は、古くは盆踊りなどの踊り歌や酒造り唄などの作業歌の一種として、親しまれてきた。リズムが一定で手拍子を加えやすく、耳になじみやすい音楽である。構造がシンプルで、誰もが歌うことができるよさがある。

この活動では、歌詞に合わせた旋律づくりが中心になる。子どもは『池に行くときは明るい曲を歌いたい』『旅を音頭で表現したい』と、形態と自分をもつ印象を照らし合わせながら、よいと思う音楽を探し続ける。

○ 5年生「唄い・舞い」

篠笛と太鼓の囃子にのせて、オリジナルの舞をつくる。

子どもは、岩手県の郷土芸能である「大黒舞」と出合う。実際に舞い、唄い、囃子を奏でることで、舞の楽しさ、舞が表現するもの、音楽と舞の関係性などに注目し、舞う楽しみを味わう。

「大黒舞」に熟達した後、子どもは面をつけて舞う。面をつけて舞うことで、素颜では味わえない、なりきる感覚を楽しむ。子どもはそれを生かし、自然、物語の一説などを題材として、舞を創作する。それらを通して、舞う面白さと表現する楽しさを実感する。

○ 6年生「FUZOKU STOMP」

楽器や日用品を使ったリズムパフォーマンスをつくる。アメリカで人気を博したパフォーマンス「STOMP」をヒントとし、自分が感じるもの、感じることをリズムで表現する。

対象となるリズムは、ロックやジャズ、アフリカンなど多岐にわたる。全てのリズムを一人で担当することはできないため、数名のグループを編成し、それぞれにアンサンブルを構成する必要がある。

いくつかのグループに分かれてステージを構成することを考えた時、子どもは『ステージが盛り上がるように順番を考えよう』『観客が楽しめる構成になっているか』などの意味をつくる。一つ一つのパフォーマンスがつながることを考えることを通し、伝えることの楽しさとおもしろさを実感する。

(2) 構想の特色

○ 音楽をあそぶ

子どもは「あそぶ」存在である。興味をもったものに熱中し、没頭する。興味をもつものは様々だが、熱中したもの、没頭したものは飽きることなく対象としてかわり続ける。またこの時、子どもは他者の評価は気にしない。あくまで自分の世界に没頭し、つくり、つくり変え、つくり続けている。

音楽科では、子どもの「あそぶ」を、活動全てを支える基盤としてとらえる。音楽科における全ての領域はこの子どもの姿を基に構成する。

○ 自分たちの芸能をつくる

子どもは、音楽の活動を通して、音楽の魅力を味わいながら音楽が表現できる可能性について模索し続ける。音楽科では、歌唱、演奏、舞踊を全て表現としてとらえ、表現が様々につながりながら渾然一体となって表れるものを芸能と考える。子どもは、自分たちの表現を追求する中で、自分が感じたこと、表現したいこと、つくりたいことを言葉にして友だちと伝え合う。そこで用いられた言葉は共通認識となり、その子どもならではの芸能の礎となる。

子どもは、自ら感じ、考え、会得したものを次の表現へとつなげる。自分たちが芸能をつくる感覚をもって活動し続けることで、子どもは音楽の世界を広げていく。

4 音楽集会について

音楽集会について、子どもは『普段の音楽の活動とは違う経験ができた』『力いっぱい表現できて楽しかった』『仲間と力を合わせて表現できたことに満足した』などの意味をつくる。

音楽集会は、集団での表現するよさを味わう場である。この時の集団とは、全校、学年、ブレイングチームなどである。それぞれの集団で歌ったり踊ったりすることを通して、普段の活動とは違った表現のよさを味わう。また、それぞれの集団に所属している実感を味わい、よりいっそう集団内での仲間とのつながりを強くする。また、音楽集会はどの学年のどの子どもでも等しく参加できる会である。それぞれの学年、学級の子どもの歩みに沿った表現が保障される。運営は主にミュージックプロジェクトが行う。

○ 実施回数

年5回（春、初夏、夏、秋、冬）

*夏の音楽集会を研究会公開とする。

○ 内容

全校合唱、音楽ゲーム、ダンス、企画コーナー、「きらめく☆マイスタイル」など
連携協力は・Ryojin（和太鼓奏者）及び 布施建築（木工、楽器等制作）

註

- 1) International Society for Music education (ISME) 2012 ギリシャ大会
- 2) International Society for Music education (ISME) 2012 ギリシャ大会
- 3) ISMEアジア環太平洋地区大会 (APSMER) 2013 シンガポール大会
- 4) International Society for Music education (ISME) 2014 ブラジル大会
- 5) 奥忍・頼美鈴 他 (2012) 「芸術関連諸教科の統合的アプローチの検討ードイツと台湾の例を参照しながらー」日本音楽教育学会 第43回全国大会 共同研究 I パネル・ディスカッション
- 6) 昭和50年代後半に副校長を務めた長野克己氏へのインタビューによる当時の活動状況の談話から(2014.9)
- 7) 同上
- 8) 日本音楽教育学会 第37回大会 シンポジウム『今学校音楽科に求められるもの』2006年10.28 於：千葉大学 2008年日本音楽教育学会全国大会 シンポジウム 「今学校音楽科に求められるもの」において、パネリストから、「今後、音楽教育が唯一、貢献できることは、子どもたちのコミュニケーション力の育成である。」との提言がなされた。

引用文献

- (1) 上越教育大学学校教育学部附属小学校 (2001) 『わが校百年の教育史』上越教育大学学校教育学部附属小学校『わが校百年の教育史』編集会 p.352.
- (2) 湯澤卓 (音楽専科) 上越教育大学附属小学校 (2013) 『2013年研究 年間活動構想表』上越教育大学附属小学校 p.38.
- (3) 同上 p.38.
- (4) 同上 p.38.
- (5) 同上 p.38.
- (6) 上越教育大学附属小学校 (2004) 『心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造ー心豊かに生きる子どもの学力ー研究紀要Vol.1』上越教育大学附属小学校 p.115.
- (7) 湯澤卓 (音楽専科) 上越教育大学附属小学校 (2013) 『2013年研究 年間活動構想表』上越教育大学附属小学校 p.38.
- (8) 上越教育大学附属小学校 (2010) 『自尊感情が高まる道徳教育と総合学習ー自分をまるごと好きになる!』明治図書出版株式会社 p.140-141.
- (9) 湯澤卓 (音楽専科) 上越教育大学附属小学校 (2014) 『2014年研究会 1日目 活動公開 I・II』上越教育大学附属小学校 p.37.
- (10) 湯澤卓 (音楽専科) 上越教育大学附属小学校 (2014) 『2014年研究 年間活動構想表』上越教育大学附属小学校 p.38.

参考文献

- ① 上越教育大学学校教育学部附属小学校 (1981) 『わが校八十年の教育史』東京法令出版株式会社
- ② 時得紀子(1997). 「総合的学習と表現教育」村川雅弘編著『総合的学習のすすめ』東京：日本文教出版. pp.131-148.
- ③ 上越教育大学学校教育学部附属小学校 (2002) 『Curriculum2002ー学びが生成するカリキュラムー』上越教育大学学校教育学部附属小学校
- ④ 時得紀子 (2002) 「総合的な学習における音楽科のかかわり」日本学校音楽教育実践学会編「音楽科と他教科のかかわり」東京：音楽之友社. pp.19-23.
- ⑤ 上越教育大学学校教育学部附属小学校 (2003) 『Curriculum2003ーカリキュラムの評価改善ー』上越教育大学学校教育学部附属小学校
- ⑥ 上越教育大学附属小学校 (2004) 『心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造ー心豊かに生きる子どもの学力ー研究紀要Vol.1』上越教育大学附属小学校
- ⑦ 上越教育大学附属小学校 (2005) 『心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造ー「関係力」に着目してつなぐ6年間ー研究紀要Vol.2』上越教育大学附属小学校8)
- ⑧ 上越教育大学附属小学校 (2006) 『関係力ー「子どもが生きる学力」への挑戦ー』株式会社教育開発研究所
- ⑨ 上越教育大学附属小学校 (2007) 『心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造ー「関係力」に着目し、教育活動を問いつける教師の取組ー研究紀要Vol.3』上越教育大学附属小学校
- ⑩ 上越教育大学附属小学校 (2008) 『心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造ー「関係力」で変わる子どもと教師ー研究紀要Vol.4』上越教育大学附属小学校
- ⑪ 文部科学省(2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編 平成20年8月』東京：教育芸術社.
- ⑫ 遠藤好子・上雅次 (2009) 「再編教科 表現創造科における取組」時得紀子 編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社, pp.63-66.

- ⑬ 上越教育大学附属小学校 (2009) 『人間社会を生きる子どもが育つ学校－教科・教育活動における「人間社会を生きる子ども」－ 研究紀要Vol.1』上越教育大学附属小学校
- ⑭ 上越教育大学附属小学校 (2010) 『自尊感情が高まる道徳教育と総合学習－自分をまるごと好きになる!』明治図書出版株式会社
- ⑮ 上越教育大学附属小学校 (2010) 『人間社会を生きる子どもが育つ学校－自尊感情に着眼して取り組む教科・教育活動－2010年研究会要項』上越教育大学附属小学校
- ⑯ 上越教育大学附属小学校 (2011) 『人間社会を生きる子どもが育つ学校－人間社会を生きる子どもをはぐくむ各教科・教育活動の構想・展開－ 研究紀要Vol.2』上越教育大学附属小学校
- ⑰ 上越教育大学附属小学校 (2012) 『自分らしい生き方をつくる子ども－子どものつくる意味をみる－ 研究紀要Vol.1』上越教育大学附属小学校
- ⑱ 時得紀子 (2012) 「総合表現型カリキュラム開発と実践－創造力と課題解決力を培う創作活動を中心に－」日本カリキュラム学会 第23回大会 於：中部大学 課題研究 (パネリスト) 発表要項要項
- ⑲ 上越教育大学附属小学校 (2013) 『2013年研究 年間活動構想表』上越教育大学附属小学校
- ⑳ 上越教育大学附属小学校 (2013) 『2013年研究会 1日目 活動公開Ⅰ・Ⅱ』上越教育大学附属小学校
- ㉑ 上越教育大学附属小学校 (2013) 『2013年研究会 2日目 活動公開Ⅲ』上越教育大学附属小学校
- ㉒ Tokie, N., Russell-Bowie, D., Marjanen, K.,(2013) “The Effectiveness of Integrating Music and Other Subjects on Students’ Development : The Music Education Situation in Australia and Finland and its Implications for Japan” 上越教育大学研究紀要 第32巻 pp.409-418. (日豪国際共同研究)
- ㉓ 時得紀子・遠藤好子 (2013) 「中等教育における総合表 現型カリキュラムの実践－生徒に培われる多様な力に着目して－」日本カリキュラム学会 第24回全国大会 発表要項
- ㉔ 上越教育大学附属小学校 (2014) 『自分らしい生き方をつくる子ども－意味をつくる子どもの歩み－ 研究紀要Vol.3』上越教育大学附属小学校
- ㉕ 上越教育大学附属小学校 (2014) 『2014年研究会 1日目 活動公開Ⅰ・Ⅱ』上越教育大学附属小学校
- ㉖ 上越教育大学附属小学校 (2014) 『2014年研究会 2日目 活動公開Ⅲ』上越教育大学附属小学校
- ㉗ 上越教育大学附属小学校 (2014) 『2014年研究 年間活動構想表』上越教育大学附属小学校

付 記

- * 本研究は平成19-21年度 課題番号：19530794, 22-24年度 課題番号：2530958, 25-27年度 課題番号：25381176のいずれも、科学研究費補助金 基盤研究(C) (研究代表者：時得紀子) を受けた、表現活動にかかわるカリキュラム開発の9か年間に亘る継続した国際比較研究の一環をなす。
- * 本研究は、平成26-28年度兵庫教育大学連合大学院共同研究プロジェクトQ「芸術表現教育におけるコンピテンシー育成のためのプログラム開発に関する研究」(国際比較共同研究・プロジェクトリーダー：時得紀子) の助成を受けた。
- * 本研究はISME(International Society for Music Education国際音楽教育学会) イタリア2008・北京2010・ギリシャ2012, アジア地区：上海2009・台北2011・シンガポール2013における研究発表 (全て査読付・Full Paper採択) を基盤とする。特に2008・2010の英論文は上越教育大学附属中との共同研究である。

A Research of Integrated Expressive Activities of Elementary School Education

— A Study Incorporating ‘Music Assembly’, Elementary School
Attached to Joetsu University of Education —

Noriko TOKIE* · Taku YUZAWA**

ABSTRACT

This research focuses on cases of recent practice of music assembly, one of the traditional integrated activities of the Elementary school attached to Joetsu University of Education. The cultivation of various abilities in the children is discussed, making use of the descriptions students wrote after activities, performance evaluations, project planning and management, and the interviews of teachers who participated.

Since this music assembly started in 1979, students from all grades have participated every year. In addition to the all-school chorus and dance, there are other activities for which students are separated into small groups; these always consist of a number of students from every grade.

An additional benefit of the assembly is that it encompasses more than just Music. The results and problems that arise in the production are discussed in the Mental Action period, for example. The same elementary school has “Cultivate Children to have an Enriched Life” as its theme, and this can be seen through the group activities in this music assembly, and the children’s expression of “connect our hearts and minds to create a good time for everyone”. The assembly’s style is to create a stage production that involves singing, performance, dance and other expressive activities, and it has survived and thrived using this same method for more than thirty years.

Given the trend of school Music class today to place more emphasis on the international, something that can encourage the development of creative thinking and problem-solving abilities from the integration of such diverse subjects as dance, arts and crafts, drama, Japanese language (monodrama) is desperately being sought.

This paper also considers the good practices that can be derived from focusing on the various activities involved in the music assembly, such as the mixed-grade grouping and the importance of physical expression, that have spread throughout the Joetsu University Elementary school for many years.